

HUANG
KUAN CHUN
ZON
Pilone

黄冠鈞
ゾン・ピロン

片山達貴

Tatsuki
Katayama



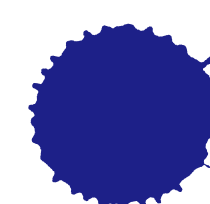
映像:『OBJECT SCAN TELEVISION』2019 | ZON PILONE ゾンピロン ペインティング:『Silver』2018 | 黄冠鈞 ファン・カンチュン

2019年度前期

Galerie Aube 公募展

在学生・卒業生

6.19^{Thu} – 6.28^{Fri}
10:00–18:00



学校法人 瓜生山学園
京都造形芸術大学



《息を合わせる》2019

Yuto
Yonemura

米村優人



《合体彫人ピウティギーン》2019

2019年度前期

Galerie Aube 公募展

在
学
生
・
卒
業
生

6.19^{Thu}–6.28^{Fri}

10:00–18:00

会期中無休

京都造形芸術大学 Galerie Aube

入場無料

京都造形芸術大学内にある本格的な展示施設、ギャルリ・オーブ。本年度もこの空間で、公募により選ばれた本学在学生・卒業生による展覧会を行います。

ギャルリ・オーブは、国内外のすぐれたアーティストによる旗幟鮮明の作品展示を行い、伝統を現代に活かす創作活動に挑戦するため、2005年に開設されました。

米村優人 Yuto Yonemura



《YOUNG RICH》2018

本展覧会は、竹浦曾爾、長谷川大祐、藤本流位、米村優人によるグループ展である。本展覧会では、藤本の研究領域である、精神分析学者のカトリーヌ・マラブーによって提唱された「可塑性Plasticity」という概念に着目する。可塑性とはある物質に力を加えたとき、その外力の痕跡が物質に宿る性質であり、マラブーはその性質を物質だけでなく、精神的な事象にも適応した。それはすなわち、イメージを見るなどの視覚的な経験を通して、精神にも可塑性が加えられ、その形質にも変化が生じるのではないかという議論である。米村は自身の彫刻作品にて、歴史における彫刻作品の役割や表象と自分自身が彫刻を制作する際に抱えるリアリティの乖離を表現し、竹浦はこれまでの写真・映像作品において、断片的なイメージをコンパインさせることによって生じる不和や、ネット上にアップされたケンカ動画のサンプリングなど、精神分析的な意味での外傷のリバイバルを経験させるような映像を制作している作家であり、本展覧会では、物質と精神という対照的なベクトルから、表現における可塑性を検討するものである。その際、サウンドスケープを制作している長谷川による上述した両作家の制作中に発生した音声・ノイズの編集による空間演出によって、オブジェ、イメージ、サウンドによるインスタレーション作品の展開を行うものとする。

米村は自身の彫刻作品にて、歴史における彫刻作品の役割や表象と自分自身が彫刻を制作する際に抱えるリアリティの乖離を表現し、竹浦はこれまでの写真・映像作品において、断片的なイメージをコンパインさせることによって生じる不和や、ネット上にアップされたケンカ動画のサンプリングなど、精神分析的な意味での外傷のリバイバルを経験させるような映像を制作している作家であり、本展覧会では、物質と精神という対照的なベクトルから、表現における可塑性を検討するものである。その際、サウンドスケープを制作している長谷川による上述した両作家の制作中に発生した音声・ノイズの編集による空間演出によって、オブジェ、イメージ、サウンドによるインスタレーション作品の展開を行うものとする。

黄冠鈞 HUANG KUAN CHUN
ゾン・ピロン ZON Pilone



映像：『織る』2019 | ZON PILONE ゾンピロン
ペインティング：『White』2019 | 黄冠鈞 ファン・カンチュン

映像インスタレーション“Xmedia Film 2019”展示は可能な範囲で既存の知覚慣習のことを解体させて観客に媒体環境に対する批評的距離を提供する実験である。映写される方式はサウンドと映像の再現的慣習のメカニズムを新しくすることで、場所と空間のイメージと記憶の関係に接近して行くのである。ここでの黄冠鈞（ファン・カンチュン）のペインティング・オブジェ（スクリーン）は再現を可視化するフォーマットとしてのメディア（medium）に変容する。
作品1.『織る』のオリジナル上映は一日一回（上映開始15:00–16:05）に限り、一般展示はイメージが削除されたホワイト映像とサウンドだけで展示される。
作品2.『OBJECT SCAN TELEVISION』の映像はサウンドがオフされてルーフィングになる。
作品3.『タマゴ』オーガニックとオブジェの像に関する質問である。
視聴覚メディアでイメージを排除して聴覚的知覚経験を押し付けるメカニズムは身体能力である視覚、聴覚、そして運動感覚的な能力を呼び起こすコミュニケーションとも言える。このような接近と構成方式は絶えず観客自らの存在を喚起させ、観客が経験する映像空間の中、あるいは映像の中の対象と対面する経験を積極的に介入、拡張させていくためである。

片山達貴 Tatsuki Katayama



《つなぎ目から 祖母と》2018

私たちは他者と関係するとき、分かり合いたいけれど分かり合えない、どうしようもないような複雑な気持ちになることがある。そのもどかしさは、久しぶりに会う親しい友人との会話の場面や、家族との何気ないコミュニケーションの時間でさえ現れる。その時私たちは、ちぐはぐで噛み合わなくなって、どこか居心地の悪さを感じてしまう。私とあなたは、これから先何年も何十年も、そんな複雑さの中を共に生きなければならない。その一方で人と人は、そのようなもどかしさを抱えたそのままの状態、どこまでも遠くにいくことができるものなのだろう。
私は、一般に言われるつながりや絆などの言葉の奥にある、つなぎ目について探りたい。ボタンひとつでつながりあう現代の中で、いかにして他者を想像することができるだろうか。コミュニケーションのあり方が変化し、はたして私たちは他者に何を求め、そして求められているのだろうか。人は、他者との関わり合いを避けようとするときもあれば、逆に自ら積極的につながりを求めようとする。私達は常に変化の渦中にあり、同じように他者との関係性もまた変わり続けるものなのだろう。そうして生まれる「もどかしさ」は、私とあなたの関係をいかなるものになっているのだろうか。

Galerie Aube ギャルリ・オーブ

京都造形芸術大学 人間館1階
606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116
telephone : 075 791 9122 facsimile : 075 791 9127

アクセス

市バス5系統「上終町京都造形芸術大学前」下車すぐ
叡山電鉄叡山線「茶山駅」より徒歩10分
駐車場・駐輪場はございませんので、公共の交通機関をご利用ください。

主催：ギャルリ・オーブ運営委員会

